

コロナ禍で
考える

「孤立させない」 地域づくり

第3号

「つながり」見つけて生かす生活支援体制整備事業 ～生活支援コーディネーターの挑戦～



コロナ禍で休止中の地域交流サロンの代わりに始まった、吉沢町二区の「お散歩会」(写真提供：太田市社会福祉協議会)

読み解きポイント

- **元気高齢者に学ぶ
「コロナ禍でもつながる知恵と工夫」**
- **実践事例を探して取材、
情報紙に掲載して広く発信**
- **「地域のお宝」を見える化する
従来からの活動がベース**

もくじ

まちの概要と生活支援体制整備の開設	2
コロナ禍の地域支援に挑む	
生活支援コーディネーターの実践	3
事例1 空いた時間で神社の修繕	4
事例2 10年続く朝のラジオ体操	5
事例3 多世代交流の仮装行列	6
事例4 ビデオ通話アプリを活用	7
事例5 つながりづくりの「先生」	8
事例6 農地を守って地域も元気	9
事例7 つながり切らないグラウンド・ゴルフ	10
事例8 お茶飲み、お散歩、お買い物	11
「お宝」生かす地域支援とは	12-13
聞こう！生活支援コーディネーターの声	14-15
事務局からのお知らせ	16

まちの概要と生活支援体制整備の解説



太田市の中心市街地（左手のビルは市役所）



群馬県太田市おわたし

群馬県東部に位置。人口22万4497人、世帯数9万7912世帯、高齢化率25・7%（2021年3月末時点）。自動車メーカーSUBARU（スバル）の製造拠点が立地し、工業都市として発展してきた。東武鉄道太田駅を中心に市街地を形成、郊外には田園地帯が広がり、モロヘイヤやスイカ、ホウレンソウ、ネギ、大和芋などの栽培が盛ん。市域は、市の区制規則

に基づき15地区、199行政区で構成される。^{*}生活支援体制整備事業の日常生活圏域Ⅱ第2層Ⅱは単独または複数地区で9圏域を設定（ただし、第2層協議体は14か所に設置）。生活支援コーディネーターは、市社会福祉協議会の地域福祉係に第1層1人、第2層7人を配置。協議体は、第1層が年2回程度、第2層は1〜2か月に1回程度会合を開く。

※生活支援体制整備事業

2015年4月の改正介護保険法施行で、各市町村は「住民主体の地域づくり」の推進役となる生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）とも）を配置。併せて、地域づくりを話し合う場（協議体）を設置した。それらは原則として市町村全域（第1層）と、中学校区などを基に設定する日常生活圏域（第2層）とで活動。なお、自治体の規模によっては第1層が日常生活圏域となる場合も。

「コロナ禍の地域支援に挑む生活支援コーディネーターの実践

2020年4月7日、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、政府が最初の緊急事態宣言を出しました。

これに先立つ同年3月から大人数の会合やイベントを自粛・制限する動きが全国的に拡大。太田市でも、市社会福祉協議会が市内12か所の公民館・集会所で週2回開く地域交流サロン「お茶の間カフェ」(運営は各地区の住民ボランティア)をはじめ、おもに屋内型の各種サークルやサロン、交流行事などが軒並み休止に。お茶の間カフェは、休止期間がすでに1年7か月に及んでいます(2021年10月末時点)。

市社協の生活支援コーディネーターたちはこの間、基本的な感染予防策を徹底しつつ、積極的に地域に向いています。コロナ禍でもできる地域活動や住民同士のつながり・支え合いを探し、取材し、その知恵と工夫を広く発信するためです。きっかけは2020年5月に行った、第2層協議体メンバー計219人を対象とするアンケート調査。コ

ロナ禍が住民活動や人のつながりに与える影響のほか、「つながりを切らない工夫」などを尋ねる内容です。アンケートは協議体を開催できないなか、メンバーとの連絡を絶やさない苦肉の策でもありましたが、思わぬ収穫がもたらされました。「つながりを切らない工夫」について多くの回答が寄せられたのです。

コーディネーターたちは、情報を寄せたメンバーらを水先案内人に、「工夫」の現場を取材。たとえば、三密回避が容易な屋外でのラジオ体操会やグラウンド・ゴルフなどのサークル活動、自治会が主催する産直市や見守りを兼ねた廃品回収、ウォーキング、住民グループが行う花壇整備や畑仕事、親しい関係のなかで続くおすそ分けなどのご近所づき合いや少人数のお茶飲み、無料通信アプリLINE(ライン)を使った親族・友人とのビデオ通話、地域行事の中止で空いた時間を生かした神社の修繕活動など。

これらの実践を市民に周知しよう

と、情報紙「つながる通信」を6月15日付で創刊。A4判両面カラーで、原則として月3回発行。電子版を市社協ウェブサイトで公開するほか、印刷して各地区の区長会を通じて自治会へ配付、住民に回覧してもらいます。2021年11月5日時点で第55号を発行。公民館や商業施設などを会場に「つながる通信」パネル展も開きます。

情報紙の発行を重ねると、「うちの地区でもこんな活動がある」「新しくこういう活動を始めた」といった、取材要請を兼ねた住民からの情報提供が増えます。コーディネーターは住民との関わりを求めて地域に入っ

て行くだけでなく、住民の側から関与を求められる存在に。地域に入る頻度は、コロナ前とほとんど変わらな

い水準になってい

ます。コロナ禍で生まれた活動 ③つながりを切らない個人の工夫 ④コロナ禍でも集いの場を継続する組織や団体の工夫

住民一人ひとりが4要素を一つでも多く持つことが理想。その実現をあと押しすることこそ、太田市のコーディネーターたちがコロナ禍で取り組む地域支援なのです。「つながる通信」からは、その果敢な挑戦がひしひしと伝わってきます。掲載記事から8つの住民活動事例を選び、以下に紹介します。

太田市社会福祉協議会 Vol.55 発行日 2021年11月5日

広報紙 **つながる通信**

みなさんは、日々の暮らしの中に「近所付き合い」や「気の合う仲間」がいますか？ 5年後、10年後に向けて「住みやすい、住んでよかった。」と思える、人と人との「つながりのある地域」をめざし「地域のお宝」として、ご紹介していきます。

取材先 **◇沢野地区 不動産ラジオ体操**

不動産では、ご自身の健康維持のため、小林保平さんが2009年から不動産公園で早朝のラジオ体操を始めました。そこに近所の方や散歩中の方々が次々と加わり、「地域の輪」が広がっていきま

左の写真は常連の体操メンバーです。高林西町の小林保平さん(85)、志村岡本さん(76)、田口充寛さん(72)、今泉せきさん(74)、牛天町の今井福治さん(76)、大沢昭雄さん(71)、宝泉町の星野薫さん(70)が参加しています。

不動産ラジオ体操の発起人である小林保平さんは、自宅近くの2里所で家庭菜園をしています。家庭菜園では、じゃがいも・さつまいも・里芋など多くの野菜を育て、体操に通うメンバーに作業を手伝ってもらったり、おすそ分けしたりしています。

小林さんは「ラジオ体操は、毎日つづけることで1日の生活リズムも整うので大事なこと」「コロナだからといって引っこもらったり、ただ休んでいるだけではなく、人と会話することが大事」と話します。公園の空気が気持ちいいから先先行きに行き、小林さんのおかげで公園は綺麗に保たれています。

現在は10名前後の地域住民が毎朝自主的に集まり身体を動かしています。また、夏休みには育成会のラジオ体操に参加する親子とともに汗を流します。朝6時20分頃になると隣々人が集まり、小林さんの指導した2つのラジオを木に引っ掛け、6時30分になると公園のラジオ放送に合わせ、ラジオ体操第一、第二を続けて約10分運動します。

雨天の日や冬場の12月・1月・2月は、体調面を考慮しお休みにしていますが、それ以外はコロナ禍でも毎日開催し、交流を深め、いつも来ている人が笑っていなければ、どうしているか気にかけています。必ずかきつけて公園に来れない近所の方も、自宅前からお参りしたり、音に合わせて自宅の中から体操をしたりしています。

つながるポイント

＊コロナ禍でも、顔が見える関係や気にかけてくれる関係が、より一層つながりを強め、毎朝穏やかな見守りが行われラジオ体操から1日が始まります

太田市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターが取材・編集・発行する「つながる通信」(第55号)

空いた時間で神社の修繕
 〈コロナ禍で生まれた活動〉
 西矢島町(九合地区)



毎週土曜に神社の修繕に集まる男性たち

西矢島町(九合地区)を鎮守する赤城神社に、毎週土曜の朝8時30分、70歳の男性7人が大工道具を手に集まります。社殿などの修繕に取り組む人たちです。日曜大工ならぬボランティアの土曜大工。休憩を取りつつ夕方まで作業に当たります。

境内社の八坂神社も含め、神社の修繕は長年の課題でした。社殿の壁や床、基礎は傷みが激しく、業者に依頼すれば相当な費用が見込まれます。氏子の地域住民が負担するのは、現実的ではありませんでした。そこで2010年から区長や神社総代、

同世代の仲間が結集。自分たちの力で少しずつ手入れをしてきました。仕事や地区の行事などで皆忙しく、作業はなかなかかかどりません。それがこの2年ほどで一気に進展。コロナ禍で地区の行事が軒並み休止となった影響で7人のスケジュールに空きが生じ、毎週土曜を集中作業日としたのです。ほとんどは屋外作業で「三密」回避も容易。仲間にはプロの大工

もいて、作業方法や手順の指導役を務めています。基礎の補修は劣化した礎石をコンクリートで打ち替える重作業でしたが、自動車修理工場を営む仲間が耐荷重30トンのジャッキを持ち込んで無事完了。外壁などの部材の交換や塗装も着々と進み、社殿は往年の輝きを取り戻しつつあります。



修繕作業の様子

前の区長(自治会長)で神社修繕を仲間に呼びかけた小此木榮二さん(75歳)は次のように話します。「神社は私たちが子どもの頃からずっと、このまちの中心。お祈りするだけでなく、住民がつどい、憩い、交流する拠点だ。社殿や境内がきれ

いになれば親しむ人が増え、地域のつながりも守っていけると思う」コロナ禍で毎年10月の交流イベント「いいとこ西矢島祭り」と例大祭は2年連続で中止。それでも「お参りや散歩で神社を訪れる人は少しずつ多くなってる」(小此木さん)とのこと。

きれいになったね——参拝者のそんな一言が、7人の胸を熱くします。ちなみに作業日のお昼は、弁当を買って、境内にある集会所や社殿の縁、屋外のベンチなどでいただきます。「同じ金のメシ」を食べ、チームワークもばっちりです。



お昼は皆で弁当をいただく

10年続く朝のラジオ体操
 へコロナ前と変わらない活動へ
 西矢島町(九合地区)



いいとこ西矢島体操クラブ(ラジオ体操会)の参加者

「いまはおしゃべりタイム」と常連の一人、

活動は平日のみ。雨天は境内にある集会所で体操していましたが、コロナ禍では「7時30分の時点で雨なら中止」というルールを設け、屋内での活動は控えています。また、参加者は体操前に検温し、名簿に名前と体温を記入するようになりました。

「いいとこ西矢島体操クラブ」は、西矢島町にある赤城神社(前頁参照)の境内で2010年にスタートした朝のラジオ体操会です。参加者が集まる時間は、NHKラジオ第1放送で体操が流れる午前6時30分ではなく、8時15分。もともと、地元の主婦たちが子どもや夫を送り出したあとに健康づくりをしようと、この時間にしたそうです。当初集まったのは3人。そのあと徐々に参加者が増え、最近では10人前後に。2021年10月時点では、常連は70〜80歳代の8人。1人を除いて全員女性です。



神社境内での体操の様子

関塚玉枝さん(83歳)。「おしゃべりも健康にいいからね」と言って笑います。社殿の縁に腰かけて30分から1時間ほど、お互いの生活状況や暮らしに役立つ情報を交換したり、たわいなしな話や冗談を言い合ったり、たわいなく過ごします。畑仕事をしている人が季節の野菜などを持ってきて、仲間たちにおすそ分けすることもあれば。



体操後のおしゃべりタイム

と死別して落ち込んでいたけれど、ここで体操してみんなとおしゃべりすると、心も体も元気になる」と語ってくれました。唯一の男性参加者で、前頁で紹介した神社修繕チームの一員でもある森雄司さん(75歳)は、「4年くらい前から参加している。腰痛がよくなつたし、ここに通うことで生活のリズムが整うんだよ」とその効能を説きます。事前に何の連絡もなく姿を見せない仲間がいれば、誰かが電話をするか、家に寄って声をかけるなどしています。健康づくりとつながりづくり、そして見守りのラジオ体操会です。

多世代交流の仮装行列 〈コロナ禍でも集いの場を継続する組織・団体の工夫〉

石原町(葦川地区)



仮装行列の様子。子どもから高齢者まで約150人が練り歩く
(2021年3月12日、写真提供：太田市社会福祉協議会)

衣装や道具類はすべて手づくり。子どもたちも自分たちが使う衣装の一

つたのが、同町一区・二区共催の例幣使仮装行列です。毎年、地元の葦川小学校の5年生90人あまりと両区住民約50人の計140人以上が往時をしのばせる装束に身を包み、約2キロの道のりを練り歩きます。

2021年の9月から10月にかけて、石原町一区(葦川地区)の区民会館(集会所)に70〜80歳代の男性十数人が定期的に集まり、毎年3月12日の恒例行事「例幣使仮装行列」で使う小道具の一つ「陣笠」の制作に励んでいました。

へいはく、神への捧げもの)を納める朝廷からの使者のこと。その使者が歩いた群馬・栃木県内の道すじは「例幣使道」と呼ばれました。石原町には旧道筋と、例幣使にまつわる伝説が残っています。そんな郷土史を生かし、多くの住民が参加できる交流イベントとして



仮装行列を発案した小澤登志夫さん

部をつくるほか、例幣使を救った「救命犬」の伝説を、住民が制作した紙芝居で学びます。準備から実行、片付け、そして衣装や大道具・小道具の保管には小学校が全面協力。子どもが騎乗する馬は、地元の飼い主が快く貸してくれます。コロナの第一波が来ていた2020年3月は、仮装行列は中止。翌21年はマスク着用や消毒徹底などの感染予防策を取って実施にこぎ着けました。



小道具の一つ「陣笠」制作に励む男性たち

仮装行列を発案した一区の元区長で、現在は同区老人クラブ「遊友会」の会長を務める小澤登志夫さん(73歳)は、その狙いを次のように説明します。

「石原町は宅地開発に伴って新たに移り住む人たちが多くなっている。新旧の住民が世代を超えて、郷土史に親しみながら一緒に取り組む行事があれば、顔の見える関係を築いていける」

従来、同規模の交流イベントは毎年8月の夏祭りのみ。こちらは密集・密接を避けるのが難しい場面もあって2年連続中止となり、仮装行列の意義と重要性が一層増しています。

小学生から高齢者までが一行に連なつて歩く様子はそれ自体、地域のつながりを象徴するかのようです。

ビデオ通話アプリを活用
遊友会(葦川地区)
へコロナ禍で生まれた活動へ



区民会館で開かれたビデオ通話講習会

遊友会は、石原町一区(葦川地区)に暮らす60歳以上の約80人が加入する老人クラブです。親睦や交流、健康づくりのサロンやサークルを運営するほか、県・市のイベントや自治会の行事では、会員がスタッフと

して活躍。会が主催または協力する活動は、年間約60件にもなります。会員のなかには「結束バンド」というバンド名でライブ演奏を披露する人たちや、「寿会」と称する男性だけの飲食の会で独自に親交を深める

人たちもいます。小学生の下校時間に合わせて防犯・交通安全を図る地区の「安全見守りたい」活動でも、主要な担い手は会員たち。

多彩な活動を繰り広げる遊友会とその会員ですが、コロナ禍の第一波が押し寄せる2020年3月ごろから、感染予防のために大幅な「自粛」を余儀なくされます。



生活支援コーディネーター(写真左奥の男性)が講師に

最初の緊急事態宣言が解除されてまもない同年6月9日、会は区民会館(集会所)で無料通話アプリLINE(ライン)によるスマートフォンのビデオ通話講習会を役員会に併せて開きました。まずは役員がビデオ通話を試し、会員同士のコミュニケーション維持に有効とわかれれば、一般会員にも広めていくねらいです。「実はコロナ以前からスマホを持つ会員が増え、会の活動連絡などにアプリを使うと便利ではないかといった声が上がっていた」と説明するのは、会長の小澤登志夫さん(73歳、前頁に関連記事)。

連絡や告知だけではなく、「一人暮らしの会員の見守りにもつながるのではないか」との期待もありました。そうした声を把握していた生活支援コーディネーターが、コロナ禍を機に小澤さんに講習会を提案、実現したのです。コーディネーター4人が講師役を務めました。講習会のあと役員らは、LINEのグループ機能を使って連絡を取り合っています。2021年10月時点では、「通話機能だけで十分という会員が少なくない」(小澤さん)ため、広く活用されるには至っていません。それでも、会の前向きな姿勢とチャレンジ精神は、コロナ禍でもいかなく発揮されています。



ビデオ通話を試す参加者

つながりづくりの「先生」
 村山誠子さん(数塚地区)
 へつながりを切らない個人の工夫



ビデオ通話を披露する村山誠子さん(写真提供:太田市社会福祉協議会)

「コロナで逆に人の心の温かさを
 感じるが増えたように思います。
 つながりのたいせつさも実感します」
 こう話すのは大原五区(数塚地区)
 に暮らす村山誠子さん(85歳)。
 仏画と俳画の指導者で、外国人向
 けの日本語教師も務めています。視
 覚障害者のための朗読や、高齢者介

護施設での傾聴のボランティアも。
 「歌が趣味」で以前はコーラスサ
 ークルや合唱団に所属。現在はシャ
 ンソン教室に通っています。
 コロナ禍でいずれの活動も大きく
 制限されました。絵のお弟子さんや
 日本語の生徒、ボランテニアや趣味
 の仲間、市内外の友人たちに会えな

い日が続きます。
 「でも、私は憂うつ
 になつたりしない
 です」
 絵手紙を書いて送
 ったり、コロナ前は滅
 多に連絡を取らな
 かった友人にも電話を
 かけてみたり。
 「久しぶりーって話
 が盛り上がるんです。
 コロナでたいへんね、
 会いたいわねって…」
 南米や東南アジア
 など世界に散らばる
 かつての日本語の教
 え子たちとも、電話で

近況を語り合います。
 「とにかく人と話をしないとダメ。
 声も元気も出なくなってしまうす
 から」
 夕飯を家で一人で取るときは、無
 料通話アプリLINE(ライン)の
 ビデオ通話を活用。名古屋に住む娘
 とつないで、お互いの顔を見ながら
 食事と会話を楽しみます。

「距離は遠くても、心は密なんで
 すよ」
 インスタグラムやフェイスブック
 などのSNS(会員制交流サイト)
 にも日々の印象的な出来事や風景を
 投稿、さかんに情報発信します。
 マスクが品薄になったときは、お



描きためた絵手紙作品(写真提供:太田市社会福祉協議会)

手製の布マスクを仲間や友人、離れ
 て暮らす家族に送りました。
 絵手紙、電話、手づくりマスク、
 そして最新のIT技術で温かな気持
 ちを伝え、心のふれあいを保ちます。

LINE友だちの一人で、市社会
 福祉協議会の生活支援コーディネー
 ター、鈴木彩乃さんは次のように話
 します。

「村山さんはよく、時候のあいさ
 つに季節感のある写真や動画を添え
 て、LINEで送ってくれるんです。
 私も見習いたいと思います」
 絵や日本語だけでなく、つながり
 を切らない暮らしかたの先生、それ
 が村山さんです。



LINE友だちの1人、生活支援コーディネーターの鈴木彩乃さん(右)と

農地を守って地域も元気
〈へコロナ前と変わらない活動〉
 台水土里推進協議会(薮塚地区)



ソバの種まきと草刈り作業に集まった協議会の会員
 (2021年8月28日、写真提供：太田市社会福祉協議会)

台水土里推進協議会は、台地区(薮塚地区)の農地や水路・ため池・農道といった農業施設の維持管理をはじめ、自然環境と田園景観の保全、住民交流などを目的に2007年に結成されました。

会員は農家を中心に、自治会、老人会、育成会などのほか、「ひまわり会」「台花クラブ」「台ボランティアグループ」といった親睦・交流・地域づくりを目的とする各種団体に所属する計約130人。

現在、地区に5か所ある遊休農地約1・5ヘクタールを活用し、ソバやドーム菊、ヒガンバナ、ツツジ、ウメ、ロウバイなどを栽培しています。

そのうちの1か所、台地区公民館から東へ200メートルほどの道路沿いにあるソバ畑を10月初旬に訪れると、花が見ごろで通りかかる人の目を楽しませていました。毎年11月下旬、収穫した実で会員がそばを打ち、住民に振る舞います。

このほか、薮塚の秋の恒例イベント「かかし祭り」への



ソバの種まきの様子 (写真提供：太田市社会福祉協議会)

創作かかしの出品も行います。活動はほぼ毎月2〜3回あり、少ないときで10人前後、多いと30人以上が参加。春と秋の道路クリーン作戦では地区の全戸(122世帯)に参加を呼びかけ、子どもから高齢者まで多くの住民がともに沿道で草刈りやゴミ拾いに汗を流します。

また、協議会が地区公民館隣接の遊休農地に整備した緑地広場では、住民が毎朝ラジオ体操をしています。総会や打ち合わせを除き、主な活動場所は屋外で「三密」回避は容易。基本的な感染予防でほとんどの活動を継続できます。

会長の小林邦男さん(82歳)は、



10月初旬、開花時期を迎えたソバ畑と協議会役員ら (2021年10月2日)

「協議会に参加してもらおうことで地域の結束が保たれる。クリーン作戦は新旧住民の交流の場になる」と説明。

副会長で台地区の区長、平石正行さん(69歳)は、「作業は大変だが、やりがいがあり楽しい。コロナで集会やイベントの多くが制限されるなか、協議会の活動は貴重」と述べています。

農地と景観を守り、住民同士つながりづくりや健康づくりに役立ち、コロナ禍でも持続可能——一石二鳥どころか四鳥、五鳥にもなる活動です。

つながり切らないグラウンド・ゴルフ
 村田寿会生品地区
 〈へコロナ禍で生まれた活動〉



村田寿会グラウンド・ゴルフ部の皆さん

グラウンド・ゴルフは体育館など屋内でプレーする場合がありますが、愛好者団体のほとんどは公園や広場など、屋外にコースを確保しています。そのためコロナ下では、大きな競技会は中止でも、比較的少人数のクラブ・サークル単位なら、マスク、消毒、検温といった基本的対策で活

動を継続できることが多いようです。新田村田町（生品地区）の老人クラブ、村田寿会のグラウンド・ゴルフ活動もその一つ。原則として県内の感染状況が緊急事態相当にならない限り、休止しません。常連参加者は、寿会の会員59人のうち15人前後（2021年10月時

合って、徒歩圏内にある区民会館前の広場へのコース設置の了承を取り付けます。

2020年11月、必要な備品もそろえ、会専用コースを開設。敷地の制約で4ホール（標準コースは8ホール）ですが、ラウンド数を4回に増やし、プレーの量を保ちます。

会館玄関の軒下は、イスを並べて休憩スペースに。ラウンドごとに水分補給とおしゃべりタイム。まるで「軒下サロン」です。雨の日はお休みですが、おしゃべりしたい人が玄関に集まることも。

「仲間と会って話ができるのが何よりうれしい。それが私の元気の秘



区民会館（集会所）玄関の軒下でおしゃべり

けつ」と話すのは、20年以上一人暮らしの83歳女性。

別の81歳女性はガンを患いプレーを控えています。「家にこもっていると、ますます具合が悪くなっちゃう」と活動日は会館に来て仲間とおしゃべり。ときにはビデオカメラでプレーの様子を撮影し、鑑賞会を開いて喜ばれています。

「仲間のつながり切らない。それが会のいいところ」と寿会婦人部長の津久井敏江さん（77歳）。

つながりを楽しく育み、守る。グラウンド・ゴルフには、そんな効能もあります。



2020年11月に開設した会専用コースでプレー

お茶飲み、お散歩、お買い物
 吉沢町二区お散歩会(毛里田地区)
 へコロナ前と変わらない&コロナ禍で生まれた活動



お散歩会のウォーキング (2020年10月28日、写真提供:太田市社会福祉協議会)

市社会福祉協議会が主催し、住民ボランティアが運営にあたる週2回の地域交流サロン「お茶の間カフェ」が毛里田地区にオープンしたのは2020年2月。会場の吉沢町二区集会所には、毎回60〜80歳代の利用者とボランティア計20人前後が詰めかけました。ところが、翌月から

コロナ禍で休止。

「ひきこもりがちだった高齢者も来てくれたのに」と残念がるのは吉沢町二区の区長、木村能治さん(65歳)。その後も県内のコロナ感染症は増減を繰り返し、再開は見通せない状況が続きます。

「家にこもりっぱなしでは心身の

不調を招きかねない。外に出てみんなで会話できるようにしなくては」

カフェ休止から半年あまりたったころ、木村さんは「集会所がダメでも公園ならいいだろう」と新たなつどいと交流の場「お散歩会」を企画。1キロほどのウォーキングに公園でのラジオ体操と休憩・おしゃべりを組み合わせた、屋外の「歩

くサロン活動」です。

カフェ利用者を中心に参加を呼びかけると「ぜひやろう」となって2020年10月に始まりました。雨天を除いて平日は毎日活動(暑さが厳しい7、8月はお休み)。50〜80歳の男女が少ないときで6、7人、多いと15人ほど参加します。

常連の一人、川井初枝さん(71歳)は、リウマチで歩行がやや不自由となり、リハビリにウォーキングを開始。「でも一人では転倒が怖くて、なかなか歩けなかった。お散歩会のおかげで、仲間と安心して歩ける。いまでは杖なしで歩ける」と喜びます。集合・解散場所は、同じく常連で



岡崎ユキ子さん宅の庭の駐車スペース。近隣住民の憩いの場だ

一人暮らしの岡崎ユキ子さん(84歳)宅。庭の屋根つき駐車スペースは10年以上前から近隣住民のお茶飲み場です。移動販売車が週3回庭に来て、お茶飲みついでに買い物も。お散歩会が始まると、自然に集合・解散場所になりました。

「岡崎さん宅のお茶飲みもお散歩会も、地区の大事な健康づくりとながりづくり。コロナ収束後もずっと続くだろう」と木村さん。

コロナ前からのつながりと、コロナ下の知恵と工夫が組み合わせられ、長く受け継がれるべき貴重な活動が生まれました。



週3回は移動販売車が来て買い物もできる

「お宝」生かす地域支援とは 太田市の生活支援体制整備

「課題解決」に住民困惑

「当初は地域の生活課題を洗い出し、住民が課題解決に取り組む方向性で生活支援体制整備事業（以下、体制整備）を進めました」
 こう話すのは太田市社会福祉協議

会の第1層生活支援コーディネーター、小林正和さん。

おもな生活課題は、高齢者の移動や買い物、見守りなど。小林さんと第2層コーディネーター7人は、まずは第2層協議体を通じて、住民が主体的に課題解決を図るよう促そ

うとします。ところが一

「話題が課題解決の仕組みづくりに入ると、住民から『また私たちに何か（負担を）求めるのか。担い手はどう確保する。必要な費用は担保できるのか』といった発言が多くなり、協議は停滞しがちになりました」
 自治会、老人会をはじめ各種の住民団体は、すでにさまざまな交流事業や健康・生きがいづくり、見守り活動などを実践。一方、担い手や後継者の確保に苦労していました。そうした状況で「新たな仕組みを」と言われれば困惑や反発も無理からぬことでしょう。

市社協が市から体制整備を受託し、生活支援コーディネーターの配置と協議体の設置に着手したのは2016年4月。第1層協議体は同年度中、第2層協議体はその後の2か年ですべての第2層圏域で設置を完了しました。

並行して、従来から市社協が助成する住民主体の「ふれあい・いきいきサロン」（高齢者サロン）とは別に、体制整備の一環として週2回の地域交流サロン「お茶の間カフェ」（市社協が主催、住民ボランティアが運営）の開設を進めます。カフェは2018～19年度にかけて12地区にオープンしました。これだけを見れば順調ですが、第2層協議体の停滞はそうしたなかで生じています。

また、大半のサロンに共通する傾向——男性が少なく、参加者が固定化——も明らかになっていました。コーディネーターたちは打開に向けて動きます。

2019年度の途中から地域支援のあり方を一部見直し、生活課題、すなわち「地域にないもの」を洗い出し、それを補う仕組みをつくって解決を目指す方向性をいったん保留



500人収容のホールで開かれた「お宝発表会」（市社会教育総合センター）
 2020年2月21日、写真提供：太田市社会福祉協議会

逆に「いまあるもの」「できていること」を見つけて生かすアプローチを取ったのです。

具体的には、地域の暮らしのなかで日々営まれる小さきさまざまな集いや支え合い、健康・生きがいづくりや役立つ活動——たとえば自宅や商店でのお茶飲みから、公園などでの散歩やラジオ体操、趣味・娯楽・スポーツのサークル、地区のお祭り、草刈りなどの共同作業までを、すべて実質的な「サロン」と評価。さらに、仲間内で車を乗り合わせたり、体調を崩して寝込んでいる友人に料理を差し入れたり、サークルなどに姿を見せない人がいれば電話したり家を訪ねたりといった気遣いは、事実上の「生活支援」と捉えます。

誰もが「お宝」を持つ

実際にサービスに頼り切らずに一人暮らしや夫婦二人暮らしを送る高齢者の生活ぶりをコーディネートが取材すると、実質的なサロンや事実上の生活支援が豊富に見つかりました。

これらを地域福祉の資源と位置づけ、「太田市の地域のお宝」と呼び、

住民にアピールすることになりました。コーディネーターたちは高齢者の暮らしの場に入り、お宝を掘り起こし、その意義と価値を広く周知する取り組みを開始。情報誌の発行に加え、お宝当事者の姿に触れる発表会を開きました。映像資料も制作、DVDで自治会などに配布しています。



市と市社協が共同発行した情報誌「太田市の地域のお宝」

第2層協議体では、お宝について説明すると同時に、構成員に地元のお宝情報の提供を求めました。

「すると『私の地区にもお宝がある』『取材してほしい』といった反響

があり、前向きな話し合いができるようになりました」（小林さん）

お宝を生かす地域支援とは、住民一人ひとりが自分らしいお宝を持つようあと押しすること。具体策はお宝の掘り起こしと、情報媒体や発表会などによる「見える化」が柱となります。自分や家族が持つお宝に気づく、持っているを知らなければどうすれば持てるかを考えてもらう、そのきっかけを提供することがお宝を守り、増やす鍵です。

コロナ禍でもこうしたアプローチ



コロナ禍では商業施設などで「つながる通信」パネル展開催（3頁参照、写真提供：太田市社会福祉協議会）

は有効でした（3頁参照）。コーディネーターたちは孤立防止や見守り、健康づくり、支え合いに資する住民の営みを次々に見つけ、発信し続けています。

個人、家族、友人、自主グループ、自治会・老人会組織などさまざまな活動の場でのつながりを育む。1人がほんの2、3人でもいい、気にかける仲間を得る。仲間内でお互いの困りごとを察知し、できる範囲で手を差し伸べる——そんな関係性を地域に広げることが目標です。介護予防サロンや生活支援サービスの新規立ち上げは、その必要性も含め、こうした関係性がすでに地域に存在することを踏まえて検討すれば、より効果的な開設・運営に結びつくでしょう。

そして、介護・福祉のサービスを利用しても地域のつながりを損なわない配慮が、すべての専門職の共通認識となれば、お宝とサービスの調和を図ることも可能となります。本来の意味で「高齢でも誰もが自分らしく」暮らせる地域社会へ、着実に前進が期待できるのです。

聞こえろ！生活支援コーディネーターの声



太田市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターたち（左から川田敬一さん、町田充隆さん、鈴木彩乃さん、小林正和さん、関口桂子さん、秋谷蓉子さん、須藤美樹さん、廣瀬将貴さん）

太田市社会福祉協議会の生活支援コーディネーター8人に2020年10月6日、インタビューを行い、これまでの取り組み、その背景にある考えかた、コロナ対応やコロナ後の展望などを語ってもらいました。第1層担当の小林正和さんをはじめ、第2層7人のコメント（要約）を紹介します。

お宝を探して「見える化」

小林正和さん



「太田市のお宝とは、端的には人のつながりと、つながることが高齢になっても自宅や地域で元気に過ごせるその暮らしがりのこと。これを見える化し、広めていくのがお宝を生かす地域支援」コロナ前に500人収容のホールでお宝発表会を開き、たいへん好評でした「コロナ禍では公民館や集会所などのサロン、会合、イベントが休止。でも、お宝的つながりを持つ人たちは感染防止に配慮して小さな交流を続け、孤立やひきこもり、虚弱を上手に防いでいます。私たちはそれを見つけて取材し、広く知ってもらえるようにしています」住民活動の取材件数はコロ

ナ前とほぼ変わりません。情報紙に加え、商業施設などでのパネル展も行っています「コロナ禍でどう知恵や工夫は、コロナ後の地域づくりにも役立つでしょう」

コロナで集いの場が「二極化」

川田敬一さん



「公民館や集会所の、ある程度公的な位置づけのサロンなどはコロナで休止。一方、小規模で私的な集まりは工夫して続けているところがたくさんある。その二極化が印象的です」私たちは、実際につどいや交流を続ける人たちが取材し、どんな活動で、どんな配慮があればリスクを抑えられるか、具体事例を情報紙の記事として示し、お知らせしています。こうすればコロナ禍でも日々の

生活を豊かにできますよと提案したい。集まる方法を模索する人たちに、工夫してつどい姿が共感を持って受け止められるといいですね」

家族のお宝に気づく

須藤美樹さん



「生活支援コーディネーターになるまで地域のつながりというのをあまり意識していませんでしたが、お宝取材をして、皆さん楽しそうだな、こんな年の取り方ができたらいいなと私自身そんなふう思うようになりました」私の母は一人暮らしですが、いつ訪ねても留守。以前は『家を空けてばかりで困る』と思っていましたが、実はお宝をたくさん持っていたからなんです。そんな母の暮らしを応援してあげられるようになりました」

つながりある人は元気

秋谷蓉子さん



「お宝取材を通して感じたのは、つながりを持つ人は皆元気で、心がいきいきしているということ。つながりをつくり、守っていくことが健康寿命を延ばすことになるのではと思います」先日パークゴルフ場で取材したんですが、そこに集まる一人ひとりがまた別のお宝的なつながりや場を持っているようでした「一人でも多くの住民とお話をして、つながりの輪への入り方を教わり、多くの人に伝えられればと思います」

毎朝のラジオ体操に注目

町田充隆さん



「コロナでサロン活動が休止するなかで、住民はそれぞれ工夫して集いと交流を続けています。取材させてもらうことは私自身にとっても勉強になります。コロナ収束後の地域づくりを考えるうえでも参考になると思います」毎朝公園でラジオ体操をするグループを取材したのですが、誰でも気軽に参加でき、サロンと違って男性が多い特徴があります。体操前後に会話も弾み、健康増進だけでなくつながりづくりにもなっています」

お宝情報で地域に活気

廣瀬将貴さん

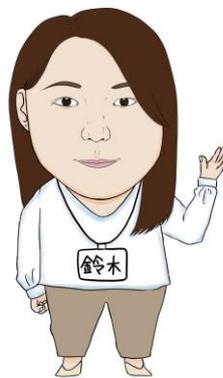


「生活支援体制整備の開始当初、住民への説明に苦慮しました。サロンや生活支援サービスの立ち上げは、暮らしやすい地域づくりの一つの手段ですが、それ自身が目的や成果のように扱われがちで、住民も私もどこか釈然としないものがあつたと思

います」お宝を見る化し広めていくことは、手段と目的がわかりやすい「お宝を情報紙で取り上げると、当事者や周囲の人たちがとても喜びます。地域が活気づくききっかけにもなるのでは」

つながりの実相と価値

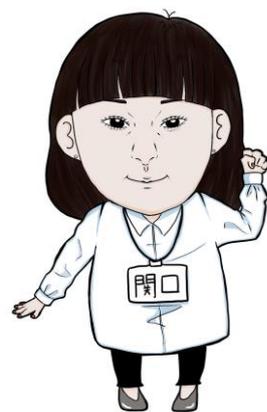
鈴木彩乃さん



「お宝に触れ、ようやく本当の人のつながりを知ったと思います。仲のいい人たち同士ができること・できないことを交換して支え合う。運転できない人を車に乗せてあげたり、具合の悪い仲間の手料理をおすそ分けしたり、一人暮らしの人をさりげなく見守っていたり」当事者や家族は案外その意義や価値に気づいていません。あらゆる機会をとらえてそれを伝え、理解や共感を促したい」
「今後は高齢者だけでなく、子どもや若者、障害を持つ人のお宝にも目

を向けていきたいですね」
現場に何度も足運び

関口桂子さん



「お宝取材のときは、できるだけ住民の自然な姿と笑顔を撮影しよう心がけています。だから何度も足を運び、その場になじんでからが取材の本番。最初のうちは皆さん身構えてしまつて、いつもの様子と違っていることが多いですよ。何度も通つて、私が『また来たよ』と言うと『待つてたよ』なんて笑顔返してくれると私もうれしくて、自然体で接することが出来ます。高齢になつてもみんなが笑顔でいられるといいですね」

各コメントに添えた似顔絵はすべて、生活支援コーディネーター鈴木彩乃さんの作品です。太田市社協の「つながる通信」でも解説欄などで使われています。

事務局からのお知らせ

オンライン講座のご案内

本誌で紹介した群馬県太田市の取り組みを聞く講座をオンラインで開催します。

インタビュー動画も含めながら、太田版つながりのある地域づくりを学び合います。

「つながり」を見つけて生かす生活支援体制整備事業 ～生活支援コーディネーターの挑戦～

日 時：2021年12月20日（月）11:00～12:00

開催方法：オンライン（Zoom）

参加費：無料

ゲスト：太田市吉沢町二区 区長 木村 能治さん（本誌11pで紹介）

太田市社会福祉協議会 第1層生活支援コーディネーター 小林正和さん ほか

お申し込み方法：ホームページよりお申し込みください。<https://www.tunagari-pj.net/case>

本情報誌のバックナンバーおよびオンライン講座のアーカイブはホームページからご覧いただけます。

アーカイブ版では、オンライン講座当日放送した参考映像がご覧いただけるサイトの紹介や、現地映像にさらに取材映像を追加した特別編を公開中です。

<https://www.tunagari-pj.net/case>

つながりPJ事業のご案内

＜支援者交流・相談会＞

地域共生社会の包括的な支援体制の構築に向けて、「断らない相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」等を進めるうえで、アドバイスを求める支援団体・自治体等を募集します。

対 象：包括的支援体制構築に取り組む支援団体・自治体

対 象 数：10団体程度（先着順）

受 付：ホームページで受付中 <https://www.tunagari-pj.net/advice>

支援形態：当プロジェクト運営委員等を中心としたメンバーが、オンライン（Zoom ミーティング）で、ともに考えたり、アドバイスを行います。（1回1～2時間。複数回になる場合もあり。相談内容は原則非公開です）

そ の 他：公開型の情報交換・相談会の企画もごさいます。企画・準備が整い次第、ホームページ上でお知らせいたします。

【主なアドバイザー（本プロジェクト運営委員）】

榎部 武俊	（一社）釧路社会的企業創造協議会（北海道）
森田 真希	（特非）地域の寄り合い所また明日（東京都小金井市）
塚本 秀一	（社福）湘南学園（滋賀県大津市）
池谷 啓介	（特非）暮らしづくりネットワーク北芝（大阪府箕面市）
山本 信也	（社福）宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）
風 保憲	（社福）淡路市社会福祉協議会（兵庫県）
上村加代子	（特非）にしはらたんぼぼハウス（熊本県西原村）
佐藤 寿一	（社福）元宝塚市社会福祉協議会
池田 昌弘	（特非）全国コミュニティライフサポートセンター（宮城県）

発行元：孤立させない地域づくりのためのつながり推進プロジェクト
<https://www.tunagari-pj.net/>

事務局：特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター
〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1F
TEL:022-727-8730 FAX: 022-727-8737
URL: <https://www.clc-japan.com>

本情報誌は、厚生労働省 令和3年度新型コロナウイルス感染症セーフティネット強化交付金の助成を受けて作成しています。